

状

(岩手県 田辺 壮久)

追憶ソ連抑留記

茨城県 須藤 富之助

「昭和二十(一九四五)年八月十五日」永久に忘れ得ぬ年月日である。「将校生徒の矜持を心せよ」この教えを旨として、平壤(ピョンヤン)にあった教育隊において、日夜訓練に精進していた。当時としては夢も希望もあったので、ただただ一途に修業に邁進していたのである。

しかしながら、時すでに戦雲は極めて決定的なる戦況に追い込まれていた。私は歩兵中隊の第二区隊に所属していた。区隊長渡辺義晴中尉、区隊付将校も折に触れ戦況の不利なることをほのめかしはしたものの、我々候補生の士気昂揚に努めておられたことは言うまでもなかった。

戦況最悪なる事態も知る由もなく、昭和二十年八月十五日の終戦日を迎えた。私は当日秋乙の教育隊から平壤へ作業に出ていたが、急遽引揚命令が発せられたのである。さっぱり要領を得ず、不審に思っただけで帰隊する折、重大なる発表があることを聞かされた。各部所に出動していた各隊も続々と帰隊してきた。教育隊に入門するや眼前に映ったのは、同輩達が完全軍装を整えられ、実弾受領逐次隊伍を整え隊を後にして出発して行った姿である。何とその勇壮さに若い血は燃えたのである。「昼食後全員営庭に集合」との区隊長の指示により、隊形を整え、教育隊長に対しての敬礼後重大放送を聞くべく隊形を整え準備は完了した。正午いよいよ放送開始となって候補生全員かたずをのんで拡声器に注目して待ったのであるが、雑音ばかりで、ほとんど内容を知ることができなかった。お互いに顔を見合わせて、意味不明の方が大部分ではなかったろうか。ソ連の参戦なども知り得たので一層の激励かと素朴にそして真剣に

考えていた。しかしながら時局は全く変わっていたのである。森野歩兵中隊長は中隊舎前に全員を集合せしめ悲壮なる訓辞を行ったのであるが、いつもの森野少佐の面影は失せてしまっていた。

平壤の市街地は各種団体企業等の崩壊が問題となった。

治安維持ということで緊急編成によって組織されて各部所についた。私は治安と警備のために中和地区鎮南浦方面の中和の本部付として貨物廠の警備に当たった。この任に当たって意外なる場面に驚いた。それは中和地区には朝鮮軍の軍需物資が備蓄されていたので、食料ほか衣服関係が野積みされていた事である。豊富な物資に驚きである。これらの食料を食して、満腹の日々を送っていたのである。外部との様子は全く知る由もなく過ごしていた。そんなとき、北朝鮮から続々と南下して来る部隊の大移動が始まっていた。朝鮮人に扮装し京城（ソウル）へ南下して行くのであるが、その姿を見るととき往時の軍人の姿はなく、哀

れさをつくづくと感じた。自分は後年にもっと惨めさを味わうことも知らずにそんな思いをしたわけである。しかしながら彼らの行動は当を得た賢明な行動であったのである。そんな生活の中で千葉県の増田君や妹尾君たちとも親しくなって種々と語り合っていた。そんな折、羅南から来て警備に当たった小隊は突然中止して引揚げを通知して来た。それは何らかの情報によって行動に出たことと思われる。

そんな悠長な日々を送っていたとき突如として異変が起きた。いわゆる治安隊と称する数十人の者が我々警備地区に侵入して来たのである。車両二台に分乗して来た。我々はとっさに抵抗すべきではないと判断し、隊長は彼らの意のままに従った。一応の申し送りを行い、何日かを過ごした中和地区から教育隊へと引き揚げたのである。衛門を入れて見て異様さに驚いた。兵舎は電灯の明かりがこうこうとしてまぶしいくらいに変わっていたのである。自分たちの中隊には候補生仲間、そ

して將校は本部に下士官、兵は第一中隊にと各々と区分配置されていた。いよいよ明日は原隊復帰ということである。原隊（朝鮮平壤第四十二部隊）への思いを抱いて装具を整えて準備万端同僚へのこと、上官古年次兵などが居るはずであるから、そんな諸々の思いを抱いていた。

その当ては全く外れて、九月一日午後十一時「三合里兵舎」に集結の命令が出た。「三合里兵舎」は自分が入隊した原隊の演習所であった。原隊復帰の夢は全く消えてしまったのであった。また命令下達がふるって、三合里に集結して内地帰還の前提であると言うのである。中和地区の警備で親友となった妹尾君と共同作業で大きな梱包を二個作った、被服関係一切いづれもたくさんなる持ち物である。内地へ持って帰ったならどんなにか喜ばれるだろう。応召時を思うとき到底手に入れることのできない貴重品である。部隊は平壤師団管区の各部隊が三合里へ向かって長蛇の列を成して行進した。我々の部隊も続いて行軍を続

行していくのであるが、何と申しましても先ほど述べた通り欲が出て大きな背負荷の重さには閉口してしまった。長い道中では耐えられないと思うとき休憩の時間に入ってやれやれ助かった思いをした。ちょうどそのとき三合里からソ連の將校が数人やって来た。全く言葉の分からないこと、今まで見たことのないソ連の容姿とその赤ら顔の將校、何かわめいていることは分かったが、意味不明で不気味な印象を受けた。連絡に來た將校の要旨は、現在地において一部の將校を除いて分離するものであった。教育隊歩兵隊長の趣旨の説明によって判明したのであるが、この地において歩兵中隊の將校の人たちとも別れを惜しんだ。引き続き三合里に向かつての行軍で、互いに励まし合って三合里に到着した。

九月の太陽は既に没し暗くなっており、入口は各隊が集中して非常に混乱して順番を待っている。入口のわきを見て驚いた。そこには被服関係や糧秣等が山と積まれているのである。自動車

その他の運搬車等で持ち込んだものがすべてソ連の仕業によって没収されたのである。ソ連の処方の悪法と巧妙さと我が方の幹部の対応の幼稚さには悔しいのと無念の思いを禁じ得なかった。連絡があつて、各人の入所に当たつて荷物は一個に限ると限定された。さてどちらの梱包を持ち込むかと思案に暮れた。せつかく工夫に工夫を重ね苦痛に耐えてやっと持ち込んだのに、どちらを放り出すか、どちらも貴重品なるがゆえに残念でならなかった。結局確たる判断をする余裕も時間的になく、一方の梱包を放り投げざるを得なかったのである。長時間待たされていよいよと順番が来た。妹尾君が先に、その後について行く。両脇にはソ連兵が数人花ローソクをかざしてその明るさで自分たちを凝視しているではないか。不安の心境である。目を輝かして獲物でも狙うかのような形相である。前に入つて行つた妹尾君が自分の前で注目を浴びて捕まつた。前に来て盛んに何事かわけの分からない言葉でわめき立てていたのであ

るが、彼らは妹尾君の腕時計に目が止まつたのである。あつさり没収されてしまった。何の抵抗するすべもなく、相手は自動小銃を持ち、人相の悪い赤ら顔の兵隊にはどうすることもなく提供してしまつた。私は難を逃れたのである。そんな混雑の中で、夢中でそして長い道中の行軍と重い荷物を背負つて来た疲れでこんぱいの極に達してゐた。それぞれと疲れで、草の生え茂つてゐた原野で一夜を明かした。

夜明けを迎えて驚いた。あの三合里兵舎の中には北朝鮮からの、平壤周辺の部隊で埋め尽くされてゐた。誰もが顔を見合わせ、不安の色は隠し切れなかつた。「一体今後はどうなるのだろう」いわゆるこれから三合里收容所として実質的なる抑留生活が始まつたのである。

各人はそれぞれと梱包の中には食料も何日か分は所持してゐた。最初の何日かは三食の自活生活が始まつた。しかしそう長く続くはずはなく、周辺には「ゴミ」一つなく、一片の木屑も燃料とし

て貴重であった。燃料となるものはことごとく燃やされ被服類まで消費してしまったのである。ついに困却の結果大隊の炊事を考案したのである。

今まで通りであったなら一日一食くらいになっていただろう、各小隊ごとに交代でソ連兵の引率の下で収容所から隣接の松林へ伐採に行くようになった。大所帯の炊事の燃料、相当の量が必要となる。毎日採薪するわけであるが備蓄するところまででは行かなかつた。使役に出る間は常に思いは故郷への想い、親兄弟姉妹親戚友人のことが次々と浮かんでくる。いたたまれない焦慮にふけて仲間と語り合い紛らす毎日であった。

帰りたい焦りで三々五々に集まりができて内地帰還の夢を語り合っていた。そんなときに内地へ帰る命令が出たのには意外な感じがした。第一大隊、第二大隊と、各五、六百人くらいの編成で三合里の収容所を後にしたのである。

次は自分たちの番だろうと胸の躍る思いで、今日かあるいは今晚か、または明日になるのかと、

命令の出ることを心待ちしていた。期待はむなしく何の音きたもなく消滅してしまい、昭和二十一年の正月は三合里の収容所において迎えることになった。先達の者たちは一体どこへ行ったのだろうか、無事に内地帰還ができたのだろうかと思像を巡らした。

いよいよ正月は来た。五時起床で全員広場に集合して四方の神霊に遥拝を行う儀を行った。その折、野口大隊長は新年の辞を述べた。おめでとう、今年は内地帰還の年であるから十分心して努められるようにとの趣旨のことを述べた。もちろん十二月もあるのだから当然帰れることは間違いないことであると誰もが思ったのは当然である。しかし帰国の夢を見て一月は終わって二月も過ぎ三月も去って行き四月となった、三合里収容所にも春が訪れてきた。四季の春は巡り来たけれども我々には春は来たららず、暗たんたる思いに沈んでいた。これでは今年中に帰れるのだろうか悶々の日が続いた。五十人あるいは百人くらいの

使役が收容所外へ出て行って復興の作業等に従事した。

時は四月二十八日、例のごとく五十人広場に集合するよう命令が出た。どうもこの使役は收容所へは帰れないらしい情報であるが、自分もその一員として参加した。午後二時集合で、あまりの性急なので誰にも特にあいさつもできずに出発した。門前にはいわゆるアメリカ製の重輪車が待機していた。乗車をするや否や猛スピードで走った。平壤の西方かと思われる美林の飛行場へ約二時間くらい走ったかと思われる目的地に到着した。この到着した所での作業は飛行場の滑走路作りで、アメリカ製の鉄板（特殊な製品）長さ四メートルくらいで幅五十か六十センチくらいで、バランスよく穴があいている。それを継ぎ合わせていくと立派なる滑走路ができるのである。南方において米軍はこんな方法で早急に基地を作っていたのではないかと想像もしたのである。約一カ月くらいの労働によって本滑走路一本と補助滑

走路二本が完成した。早速ソ連の戦闘機が乱舞しているのには複雑な思いもした。

朝鮮で二番目の秋乙收容所

おおむね一段落がついたと思うとみるや秋乙の收容所への集結命令が下った。自分たちが入隊した平壤の第四十二部隊の近くである。先発の百人と自分たちの五十人と合わせて目の回る多忙さで、昼食もそこそこに秋乙の收容所へ入所した。それは四月三十日であったと記憶している。

秋乙の收容所は営外居住の官舎だったと思われるが、一個分隊十五人くらいで一棟に入っていた。日中の作業は平壤の航空廠の雑役が主であった。航空廠への往復に邦人の子供たちが小さい家から出て来て「兵隊さん、兵隊さん」と言って追いかけられるのは迫り来るものがあつた。

秋乙收容所に入つて初めて地方の同胞（朝鮮在留者）の生活が分かった。中には收容所にいる主人に面会に来た者もいたけれども、ソ連兵の立会

いではどうすることもできないがただただ同情の
ほかはなかった。

やっと「秋乙収容所」にも慣れてきた。そんな
ときに移動の話が出てきた、内地帰還の話であ
る。今日は第四大隊、明日は第五大隊と、もう時
期が時期だから内地は間違いないだろう。そんな
思いを胸に、いつ順番がと待ち焦がれていた。し
かし我々の期待は外れて、一個大隊の編成の一十
人は内地帰還の編成ではなく、ソ連領へ行くため
の編成だったのである。

我々第七大隊一千人にも移動の命令があり、平
壤駅より北上して興南へ集結するために約一週間
の汽車輸送である。性能は悪く、途中石炭積みの
使役もさせられ、駅に一夜を過ごす状態で三時間
四時間の停車は普通であった。やっとのことで興
南の波止場に到着した。いわゆるここからソ連領
へ輸送するわけである。ソ連の当然のことながら
連絡の不十分から輸送の不徹底か、約一カ月間は
興南の建屋において起居していたのであるが、抑

留中では一番のんきに過ごしたときではなかつた
かと思われる。そうした中で一体これからどうな
るのだろうかという落ち着かない不安な日を送って
いるとき、誰が言うともなく耳にしたのは、先発
隊は青森へ行くとのことで出発したというのであ
る。とんでもない話で、でたらめも甚だしい。

昭和二十一年七月十八日、突如の移動の命令で
ある、すなわちソ連領への移動である。余りに急
なことでは忘れ得ぬ思いをした。上を下への大騒動
である。持ち物の整理、ちやうど昼食時だったが
食事をする時間もなく、もちろん分配することも
できず、たるに入れたまま波止場まで持っていっ
た。てんやわんやで波止場に着いたのであるが、
岸壁には黒煙を吐きながら三千トンか四千トンく
らいかと思われる貨物船が横づけになっていた。
船舶については無知ではあるけれども何と御粗末
な貨物船なのだろうかという印象を強く受けた。

さていよいよ乗船も間近であるが一体どこへと
いう不安を抱きながら、複雑な思いで一応装具

(財産全部)を下ろして休憩に入っていた。七月の太陽は容赦なく照りつけ物すごい暑い日であった。飲めない生水が余計欲しくなつてどうしようもない。波止場にはソ連の兵隊がマンドリンを抱えて何かを求めている様子がまざまざと見受けられた。我々の装具を目を光らせて注視しているのである。移動するごと、また入所するたびに、貴重な物は徴発されてしまっている。予想通りソ連兵の悪党の本領発揮である。特に革製品については欲しかったらしくその持ち物は狙われた。追いかけてきて、いや応なく引きあげるのである。何の抵抗するすべもなく泣き寝入りするほかない。自分も、後生大事にして逃れに逃れてきた革製の大形の図のうを狙われて、いや応なく取り上げられてしまった。悔しいけれども抵抗することもできずあきらめざるを得なかった。せめて中味の小物は返してもらったのが慰めである。こんな結果だったらタバコにでも交換してしまった方がどんなにかまじだった。三合里においては親父からも

らつて持つて行った珍しい上等品の革財布を、まき採りに行った折に朝鮮人が餅売りに来て金を払うときにロスキーに見つかり、中身ごと巻き上げられ、これで全財産を失った。この打撃は大きかった。スイス製の十七石の腕時計も三合里においてソ連兵に見つかつてこれも失つてしまう。次々と貴重品はことごとく失つていったのである。

水筒、長靴、図のう類、大切にしていたものは彼らのえじぎになつてしまった。ソ連兵のボロ靴を与えられ、大きくて啞然とする者。ソ連兵の服装や風采を見るとき、敗戦となつた我々の服装や所持品を見る彼らは何と羨望の目でいたことが分かるのである。腕時計、革製品類、財布等貴重品をいかに隠し持つか至難のことである。帯革などの新品など見えない工夫でいかに苦労したことか想像以上のことである。

いよいよ乗船となつたのであるが、その折にも執拗に検査を行い、この場においても更に取り上

げられた。将校も今までは帯刀を許されていたのであるが、この場において取り上げられる運命に至ったのである。ある将校に至っては海中へ投棄した者もあった模様だがその心中は解せられるところである。

いよいよ乗船が始まり、長い時間を要して完了した。しばらくしてからドラの音と共に岸壁を離れた。七月の船中の暑さは厳しく、蒸し返してくる空気は苦痛であった。汗は絶えず流れた。タオルは乾く暇もなく不潔になっていく。徳田君や楨君など隣にいて苦痛を訴えていた。しかしどうすることもできない。自分は汗とほこりとによる不潔に悩まされて閉口した。船はのろのろと北上し進んで行く。一体どこへ行くのか皆目見当はつかず、悶々として赴くままに耐えていかなければならなかった。我々は一番の船底へ押し込められていたので余計と苦痛だった。食事は乾メンタイの塩分のあるもので、糧秣はある程度積んであったが大部隊の炊飯は容易でなかった。順番制で一日

に一食か二食飯が食べられるようになったが、水の貴重さには痛感させられた。

それと、まず閉口したのは蒸し暑さで睡眠がとれないことである。ようやく朝方の四時ころになると気温が下がってきて若干眠れるようなときに食事の順番でも回ってくると災難である。蒸気機関の先まで飯上げに行くのである。船倉の中で過ごしていると船の行動は分からず、いかほどのスピードで走っているのか皆目分からない。数日間走って目的地に着いたのだが、船中で想像していたような内地帰還の話ではなかった。貨物船は海上にてエンジンの音を止めた。

ソ連領のポセット港である。即上陸命令が出るかと思つたが、またソ連の手順の悪さが暴露した。下船の気配はなく数日停船の生活が続いた。早く上陸して外気を吸い、生水も飲みたい、食事もしたい、いら立つばかりであった。甲板から見たポセット港は、第一印象としては平凡なる光景に映つた。見慣れぬ不思議な建物、上陸して見る

ロシア人の珍しき。粗末な、あぶらのしみた被服をまとった青い目をしたソ連の兵隊が我々を取り巻いていた。そして早速物交（物々交換）である。煙草と帯革を取り替えようと言って来る。ソ連領へやって来てもこれだった。彼らの生活が物に恵まれず、最低の生活に耐えているかということを思い知らされた。我々の引率に当たった将校は地方人と我々の接触を警戒していた。ソ連国家の一面をのぞかれる思いからのものであろう。陸路を出発して一路ポセット収容所へ向かった。朝食もなかった、昼食も与えられなかった。そして約十六キロくらいの道程を歩かされた。

装具袋を背負って歩き続けた。水が欲しくなかったが辺りは海水だ。やっと灣から遠ざかって行く、しかし水のある場所には当たりつかない。誰の水筒にも一滴の水はない。飯より水が欲しい。もう周囲には家はなくなっていた。

長蛇の列は延々と続いていた。大部隊の行進である。誰の背のうも重そうである。第一、第二、

第三回の休憩をとったのであるが、第三回の休憩はポセット収容所の見える場所であった。そこには小さなたまり池があった。装具を下ろすや否やそのオアシス目がけて殺到した。しかし恵まれたはずのオアシスにはボウフラが浮いていたのであるが、幹部の注意も無視して口にしたのである。かなたには白い天幕舎のポセット収容所がはつきりと見えていた。

思ったより収容所には短時間で到着した。それで驚いたのは、以前に内地帰還のうわさで出発したはずの部隊が我々より早く入ソしていたことである。我々は柵外においてお互い語り合いなながら悲運を嘆いたのであった。彼らの姿を見てカーキ色の被服が黒色に変わっていたのに、いよいよ捕虜という惨めな印象を受けたのである。それにしても自分たちには、足元から頭の上まで日本軍隊当時のものを着用しているのはまだ恵まれているかと思つた。しかし我々も遠からずこんな姿になるのかと思うとむなしさを禁じ得なかった。

通訳が収容所内に入ることを指示した。重い足どりで入ったところ、幕舎は少なく、自分たちを収容するだけの準備はできていなかった。これがソ連の常套手段である。しかし今までの体験から、どこでも寝られるけれども、落ちつき、次第に空腹を覚えてきた。気の早い者は所持してきた糧秣で木切れやほろきれ等を集めて飯ごう炊きさんを始めたので、我々も負けじと飯ごう三本分の炊事ができ、同僚五人で食事が終えた途端、ソ連の監視兵が煙を発見、中止を命ぜられたのであるが、おくれをとった者は食事ができなかった。

ちょうどそのころジメジメと雨の降る日が続いて、幕舎の中のいやな日が続いた。雨の漏る中は寝ることができなかった。小さい使役はあったけれども、何日か過ぎたころ五十人の編成で収容所外の出張使役に一員として糧秣倉庫の作業にと、同一行動をとって来た隊長ほか同僚としばらくの間の別れを惜しんで車中の人となった。

糧秣倉庫の場所は非常に悪い所にあり、加えて

雨の日が続いているため陰気くさくてどうしようもなく、着ている衣類は濡れても乾く暇もなく装具はカビが生え始めてきて閉口した。

作業はトラックの積み込みである。トラックの出た後は倉庫の整理である。ソ連兵が常につきまとい、徹底的にこき使われた。積み込みの南京袋のサイズはソ連用で大きいので担ぐと重くて調子を整えるのが大変で重労働である。それでも体力的にはまだ頑張ることができた。要領よく交代で南京袋の裏に隠れて休息した。たくさんの糧秣はあるけれども、与えられるものは少量であった。持ち出し見つかりでもすれば大変なことになるのである。何といっても雨のために着るものに困って裸体で天幕を携行して頭から覆って作業に出たのであるが、連日の降雨でほどほどに困ったのである。

折も折、我々の幕舎の中へ誰も居ないことを狙ってソ連兵の別の仲間が侵入してきて、背のう袋から貴重品を持ち去った。自分は既に大部分は

失っていたが、要領よく後生大事に時計や万年筆、帯革、襦袢その他所持していた者は、その行為に憤りを禁じ得ずに惜しい思いでじだんだを踏んだのである。

折よく監視のために少佐級の将校が見えたので、その実情を訴えた。理解の上、将校らしい態度をとってくれたのであるが、大部分は返してくれたが貴重品は戻らなかった。

約一カ月くらい悪条件の中で労役に服していたとき引揚げ命令が出た。幕舎に戻り、大混乱である。ソ連兵はマンドリン（自動小銃）を振り回しながら「ヴィストラ、ヴィストラ（早く早く）」と焦らせ、大忙しで乗車場へ集合して見れば輸送列車の気配は全くなく、あきれて文句も出ない。一緒に来た者がやはり集結させられ待っていたのであるが、明日か明後日の出発であるということで行く先は皆目不明である。いわゆるポセット収容所に集結させ、各要地に輸送する集合地だったのだと思う。

いよいよ輸送列車は我々を輸送すべく待っていた。種類は有蓋貨車で、四十人、七十人の大小の貨車に割り当てられる。例のごとく乗車のための装具検査である。銃器の検査のほすが例のごとく貴重品を目当てにあさるのである。いかにも彼らは貴重品が欲しくて欲しくてたまらない様子がかかる。

八月七日午後四時ごろと思われるころ乗り込んだ。一体どこへ連れて行かれるのだろう、何日くらい乗せられるのだろう、不安の思いを抱きながら車中の人となった。

シベリア鉄道にてウクライナへ

昭和二十一年八月八日早朝、列車はポセット収容所を後にして一路目的地に向かって出発した。列車の中は暗く厳重な警戒には殊のほか驚いた。ソ連領に入ってから覚悟はしたし逃亡などは考える者はいないはずである。心細さと不安を抱きながら夢遊病者みたいな状態になっていた。扉は

食事の時以外は鏡を降ろして嚴重であつた。なおまた、窓枠は外は金網張りであり通風は悪く、そこへ八月の太陽の熱射は容赦なかつた。熱さのため^の発汗、加えての不潔の影響で疥癬病になつてしまふのである。皮膚病の一種で、伝染するのには閉口である。かゆいのでかくと水泡が破れその汁が隣の者へうつすのである。体と体を寄せ合せているのでたちまち伝染する。自分は特にひどかつた。軍医に相談してみても処置さえでえず、布きれで汁を吸い取るくらいである。上半身裸であるから次々と伝染していくのである。これに続いて壞血病が開始した。一日も早く下車にしてほしい。どんな作業でもよいから外へ出たい思いでいっぱいである。そんなときソ連中央部「オムスク」というシベリア鉄道最初の休憩駅に着いた。安堵したのは言うまでもない、待望の下車のできたのである。ここにおいて「バアニヤ」を実施した。やつとの思いで簡単な入浴ができて身体の汚れを落とすので、一応気分的にもさっぱりした。

貨車の中の装具を全部外へ出して内の清掃が行われ再び乗車したのだが、一体目的地までどのくらいかかるのだろう、誰もが不安が募るばかりである。誰もが余り余計な口をする者もない。監視兵の中で比較的よきそうな者に聞いてみたら、あと十二、三日くらいかかるだろうと言つていたが、この兵隊が分かるはずがないのであるが、もう既に二十日くらいも乗せられているので精神的にも体のためにもうんざりの境地である。腹を決めて往生するよりほかはないのである。夜の十二時ころだったろうか、ハリコフ駅に到着した。目的地ではないと想像はできたが、さすがソ連の誇る大都市であるだけに駅舎も大規模で立派なものであつた。かなり長い時間の停車である。約二時間余の停車ではなかつたらうか。後方で何か騒がしいので不思議に思つていたが、急遽変更になつて大隊は二分され、半分は下車させられた。ポセット收容所から同行して来た者が別れさせられたのである。我々は別れを惜しんで引き続

き次の目的地に向かって走り出した。

随分奥地へ来たという感じがしたハリコフ駅を出発してから二日後で九月七日午前十一時、アルチョモフスク駅に到着した。

いわゆるここが我々を輸送する臨時列車の最終駅であった。一カ月もの長い旅であり、数多くの駅を通過してきた。各駅の名称は記憶はしていないが停車駅においては食事の分配が行われた。

ウクライナ特有の風景に戸惑いを感じて足を踏み入れたわけである。そのうち誰かが当地の状況を聞き入れてきた。この地には既に日本人同胞が千五百人くらい入ソしていることを知らされた。

やはり多くの同胞がこの地に抑留労役に従事していることは我々と同じ環境で、集団の心理と言うか非常に力強く感じた。

アルチョモフスク収容所

アルチョモフスク収容所に向かって駅から五列縦隊を組んで市街地を進んで行った。我々の四列

では通用しなかった。約三十分くらいも歩いたらうか、収容所は赤煉瓦の四階建てのものであるが、東部戦線においてドイツ軍の攻撃によって爆撃された残骸の中で比較的損傷の少ない建物を利用したのである。周囲は有刺鉄線でさくがめぐらされていた。そのさく内には同胞が数多く収容されていた。いろいろと語り合いたかったが、不気味でそれもできなかった。

収容所協の広場において、腰を下ろして指示を待つことにした。しばらくしてソ連の将校が兵三人ほど連れて来て、通訳を通して病人を出すように伝えてきた。自分たち三十余人は病人として隊から離された。疥癬で全身がひどくなっていたのである。収容所の入口に整列させられたのであるが、何が何だか分からない間に装具検査が始められた。またかと思うと嫌な思いが走った、何度同じようなことをと。今度は襦袢、袴下、外套、被服、天幕、その他僅かな靴下及び手袋などすべてを巻き上げられてぼう然としてしまった。なんと

執念深いやつらであろう。これが彼らの正体だったのか、命の綱として持っていた米四合も容赦なく取り上げられ、やっとのことで入所を許された。

ドクトルの体位検査が行われ、自分は三類という体格等位となった。それから水のシャワーに入られて震えていたが、これで一応の検査は終わった。入口を見ればまだまだ多勢の仲間が入所できずに待っていた。時間は夜の九時過ぎになつたろうか、久しぶりに夜露を受けて一夜を明かした。白々と夜が更けてきた。そんな時間に、前から入所していた者が作業準備で何となく騒がしい動きが始まっていた。俺たちもこんな生活に追いやられるのかと思うと、何ともやりきれない思いである。

ここで本格的なる労働に入るわけであるが、強制という文字と疲れきった体、長い一カ月における長旅、心身共に疲れきり、こんばいの極に達している我々には同情の余地さえもなく、その配慮

のかけらさえ与えられなかった。

いよいよアルチョモフスクの収容所の強制労働が始まった。

まず第一、石山の作業である。ローム（鉄棒）、十字くわ、金矢、ハンマーを手にして毎日毎日石山へ送り込まれた。精神的にも体力的にも苦痛であった。ソ連の社会主義のノルマの強要である。

九月末ごろともなれば、ウクライナ地方も寒気が増し、初冬を感じさせられる季節となった。我々が入所したときは夏の衣服であった。日中はまだしも朝夕においては大分しみるようになった。

三百人くらいの人員を二台か三台くらいのトラックで往復輸送する。ノルマを完了してラーゲルへ帰るには順位があるから、後の方にもなる。と夜中になるようなこともあるし、ソ連の国産車の性能が悪くマッチ箱のような車で故障をするところがあると大変なことになる。夜の十時過ぎに帰って食事をするが、真っ暗いところで何が何だ

か分からない食事をすることになるのである。

朝は朝で早く起きて作業に出て行かねばならない、そんな連続である故、体力の消耗は大きく、極度に衰えていくのである。

おおむね一カ月くらいごとに体位の検査が行われるのであるが、ソ連式の検査で、でたらめもないところである。自分は検査の結果重労働から軽度の作業の方へ配置替えになった。町工場の方で針工場、硝子工場、煉瓦工場と約二カ月余において従事したのであるが、地方人との接触であるから個人的には同情してくれた点もあったので助かった。次回の検査によって二類の体格等位になったので、軽作業から次の段階の粘土山の作業場に向けられた。この作業場は能率を重点的でノルマがきつくて苦勞をさせられた。能率の上がらないグループはラーゲルの方へ通報されるので、そんなことにならないように誰もが懸命に頑張った。結局無理をする結果になるし、従って体力も消耗することになる。

この粘土作業においてもソ連の責任者の無能にもあきれるのである。条件の良い箇所悪い場所も同じ扱いをされる、そんな不合理を理解できないところに衰れを感じるのである。

アルチョモフスク収容所に入ってからいろいろと問題に直面し、苦しいやりきれない思いを残して、六月末ころかと思われるが、移動が行なわれた。もちろん全部ではないが今までよりか条件の良い環境への願いを込めて一隊がハリコフ地区に移動をした。自分もその一隊に加わって移動した。

ハリコフ収容所

さてどこへ、うわさの通り、首都キエフの東、第二の都市ハリコフ、「ハリコフ収容所」へ入所した。比較的のんびりした生活が始まった。主として収容所内の作業が多かったが、そこは製薬会社の跡地だそうで、独軍の攻撃によって破壊された跡地だそうだが、およそ二、三カ月くらいの期

間だったか、この収容所から藤井大尉を長として二百六十人ほどが「チグユ」という収容所へ移った。

そのチグユ収容所には「ゲルマンスキ」ドイツの抑留者が四百五十人ほど収容されていた。初めて見る彼らの印象は、同じ白人ではあっても何となく人間的にすぐれた、しかも利発な感を抱いた。もちろん宿舎は離れた場所で起居をしているので接触することはなかった。

さて一番困ったことは、宿舎は誠にお粗末なもので、それはやむを得ないとしても、宿舎内に巣を作って住んでいる南京虫、そしてノミ、なおまたシラミの、共同攻撃である。これには誰もが参った。幾ら疲労していても寝ることのできないつらさをだれかれとなく困り果てたのである。毎夜どんなことでも二、三回は起きて退治をするのであるが、ほとほと困り果て、隣同士で顔を合わせてもどうすることもできなかった。

当時魚の中毒で三日ほど入室したのであるが、

病室とは名のみで、問題にならなかった。その間は愛知県の上原忠作衛生兵さんには面倒にあずかり大いに救われ助けられた。

その折病室で誰かが帰還説を言ったが、その話は移動であった。エジンという所である。

エジン収容所

五十人の少数で、その一員として隊から別れてエジンの収容所へ来てみると、何とここにはアルチョモフスク収容所にいた者で知人もいた。お互い健在を喜び合った。この作業現場は三交代で、朝出、昼出、夜出と三交代で道路作業の橋梁設置の要員である。大分急を要するように感じられて、ソ連の指示する兵隊も緊張きみでいたように思えた。

もちろん重労働である。一番つらかったのは夜十時から翌朝五時までがこたえた。ミキサにて練り合わせた生コンを二人で形枠の中へ入れる作業である。足場板を渡って次々と押し出されていく

わけて、途中で渡り板から転落する組もあるが、体力的にはきつい作業だった。一応の目安がついたのかこの現場から次の現場へと移された。

十一月十二日の寒空はこたえた。防寒外套は着用はしていてもウクライナは真冬のきびしきであつた。作業は森林の伐採である。監視に当たつたソ連兵は実に程度の悪い、温情も何もないのはほとほと落胆した。

使いなれない大形の二人びき鋸でその呼吸の合わせ方が要求されるので、なれるまでが若干時間がかかったけれども、呼吸が合えば思ったほどではなかつた。しかしまたノルマで縛られるのである。正確にやれば時間内では到底難しいので、各グループで相談して積木について工夫をして空間を作る方法でその場をしのいだ。

我々は、いづどこにいても、どこの収容所へ移動されても、考えていることは内地帰還のことと、何とか腹いっぱい食事の願いである。森林伐採の現場までは宿舎から数キロの距離があり、

その途中に国営のコルホーズがある。広大なる農場である。我々はこの農場に着目したのである。

農作物が豊富にあるので、この作物を奇襲するのである。作物はバレイショ、カボチャ、トウモロコシ等が作られているのを監視兵の目を盗んで隊伍から離れて宿舎へ持ち込むのであるが、これには非常に難しい、要領よくやらねばならなかつた。夜中に炊き込んで分配するのであるから大変な仕事である。当番になった者は苦勞するわけであるけれども満腹感を覚えることだから苦にならなかつたのである。しかし何日か過ぎて、愉快な日を送っていたのであるが、ある日突然ソ連の兵隊が不審に思つたかどうか我々の便所の検査をして、トウモロコシの殻が排出されていたので証拠となつて「ヤポンスキー、ブロハヨッポイマーチ」とかなんとか言つて隊長が注意を食つたのである。以後の監視兵の厳しくなつたことは言うまでもない。このことは収容所内における珍事であつた。

森林伐採作業も一応打ち切りとなって収容所の方へ戻ったのであるが、帰った時点で身体検査が行われ、ほとんどの者が体重測定では増えていた。自分も七キロくらいは増えていたが、トウモロコシのおかげであった。同僚たちはそんな話に皆うらやましがって我々を迎えたのである。

戻ってから我々を待っていたのは大橋架作業である。冬季作業であり、体力を要するもので、一週間も続くと誰も彼も顔色なく話すことさえおっくうになる始末である。

ただ命ずるままに働かされるからなおさらの思いがする。十二月も半ば過ぎになった、いよいよ終戦後三度目の新年をこの地で迎えるのか、そんな気持ちと、来年こそは内地帰還が実現できるだろうと、そんな希望でいたのである。

また例の突然の移動の命令が出た。それも二十六日ではないか。同僚たちとここで新年を迎えられるかと思っていたので皮肉な運命である。それも五十人という。その一員として参加させられた。

汽車は例の貨物列車で南方面へ進んで行った。五日間の日程であったが、愉快なことがあった。その地方は大根列車が通るのである。いわゆる砂糖大根で、砂糖の原料を工場へ送るので駅に停車したそのすきを狙って雑のうに入れて持ち込むのである。野積みであるから容易ではあるが、見つかったら大変である。幸運にも目的が達することには我々に同情、味方してくれたものと思ってる。

クリウコフ収容所

いよいよ五日目に目的地に到着した。どんな所なのか、作業は何の仕事か、環境はどうなのだろうかと、そんな思いで到着したのは、意外な場面で肝を抜かれた。何とそこにいた者は栄養失調に近いやせ細った同僚が約百五十人くらいいたけれども半病人的な人たちであった。

さてこの収容所で驚いたのは、隊長は将校級の者ではなく兵卒が実権を握っていたことである。

今までは何か所の收容所にあつても、作業現場においても一応の秩序は保たれていたし、隊長たる者は責任者としての任に当たり、統率してきたのである。ここにおいて初めてその秩序が保たれなくなった異常さにはただただ啞然たる思いであつた。

ここの收容所は完全に崩れていた。一兵隊と二人のロシア語の達者な者の仕組んだものだった。入所に当たつて通訳を通じて責任者は「俺だ」と言うことで、ソ連の所長との取次ぎとなつたのだろうと思われる。隊長そして通訳を副官として收容所を取り仕切つた。一介の兵隊がソ連の当所長にさも当然のごとき体裁をしてやってきたとは思議でならぬ。この收容所は石掘り作業である。その採掘した石を貨車積みをする。モスクワに通ずる道路の資材とか聞こえた。

さてここは收容所の分所的な存在であるから糧秣は本部において受領するわけで、一カ月くらい単位に渡されるのであるが、途中において横流し

される様子で、到底これではと同志と計つてみたが結局は無駄であつた。ソ連の兵隊との結託をしているから始末が悪いのである。食糧事情は悪く作業石山のノルマはきつく苦しみであつた。体力のある者を本部要員として特別編成してノルマを消化させ、増食の待遇をするのである。その分一般から削るのであるから食糧事情は悪くなるばかりである。石山からワゴン車に積んで貨車積みのできる所までのノルマが八台だったと記憶している。二人一組である。

余りの労役に耐えられず、トロツコの車輪に足先を入れてけがをして休養をとる者もいた。

自分も体力が限界になつて、体重も四十四、五キロくらいにまで落ち込んでしまった。隊長もこれを認めてくれて作業現場から炊事の方へと配置がえをしてくれたので救われたのである。

この收容所の労働に耐えられずに逃亡した者もいたけれども、当然果たせることなく数日後に連行され厳しい仕打ちを受けたが、やむにやまれず

の行為であったのである。

体調もある程度良くなって、また元の作業現場へ行ったのであるが、今度は駅からの貨車積み作業である。六〇トンの無蓋貨車へ八人が一組となって積み込み作業である。腹に石を抱いて足場板を渡って積み込みするのであるが、平均五十キロくらいかと思うが、体力がないから苦勞である。六〇トン一車の積み込み作業はまさに重労働である。一定の時間が要求されるのであるからなおさら大変である。

人間は逆境にあつて薄情というか打算的というか、体力のある者同士でグループを作つて早々とノルマを終えて増食の待遇を受ける者、劣る者は劣る者同士のグループで遅れて迷惑をかける者となるわけであるが、自分は後者である。しかしながら不思議なことに、若干の増食をしてもらつても無理をして体力を消耗した者よりマイペースで無理なく耐えてきた方が最後はよかつたように思われた。

ソ連兵と本部の隊長、副官及び幹部との癒着などが長い間続いた中で一般の我々の苦痛は惨めな生活が続いた。そんな中で収容所の内部についての雰囲気は変化してきた。ソ連の上級将官に分かつてきたのだ。収容所の様子のこと、それと我々と行動を同じくしてきた大西中尉がいたが、若干ロシア語も話せたので実情等も訴えたのである。早速ソ連の収容所担当の兵隊の更迭、それから収容所の幹部ですべてうまくやつていて同胞を苦しめてきた隊長、副官及び幹部数人は他地区へ転出させられた。これによつて収容所内の空気は一変した。なぜもつと早くこんな明るい秩序あることができなかつたか悔やまれてならなかつた。食糧事情等をはじめ誰もが明るい気分になつた。

そんな折、何となくよい予感がしたのである。誰かが今度こそは本当だと言う者がいた。今まで何度となく裏切られてきたから信用する気持ちにはならないが、気分的にも明るくなった。

そして、記憶ははっきりはしないが八月に入つたころだと思ふ、移動命令が下りたのである。さて今度はどこだろうか、はたまた本当にダモイカ。もうどうでもよい、今までのように地獄のよ
うな所は他にはないだろう。

何とこの移動地が内地帰還の出発地点になつたウクライナの主要都市の郊外の収容所だったのである。大きな期待をもつて入所したのであるが、期待に違わず前の収容所とは雲泥の差があることに安堵と希望が持てた。

まず第一に、食事について、炊事に働いている人たちが白衣に身を整えて活気に満ちていた。今までとは別の世界に來た雰囲気で、今までにこんな食事にありついたことのないもので、今での例えば「カシュー」のような、見たことのない素晴らしい美味しきことは忘れられない思ひである。

糧秣においても、今までの収容所とは違つて受領されたものは一〇〇パーセント平等に配分されるし、量においても多く、炊事の責任者であつた人

に對する敬意は非常に大きいものが寄せられた。使役の作業においても、周辺の軽作業であつたので苦にはならなかつた。

何と言つても食ふこと以外に楽しみのない毎日である。限られた材料で工夫を凝らして作つてくれた炊事担当の者に感謝した。

三年間において内地へ帰還を念じていたのであるが、ウクライナ地方の晩夏から初秋の季節は非常にさわやかで、澄み切つた青い空、そして何よりも我々に希望をもたらししたのは収容所内における明るい雰囲気である。誰の顔を見ても今までのような暗い沈みきつた様子は見られなかつたのである。こんなに環境によつて違つてくるのだからか。以前の収容所に一カ月も生活していたならば生命の保証も得られなかつたかもしれない。

このハリコフの収容所に移つてから約一カ月半くらいは経たであらうか、全く雲泥の差である。今までと違つた明るい環境の中で周辺の小作業に従事していたのであるが、何となく収容所内を出

入する将校や兵隊においても、その動作そのものについても今までのようないかめしさはなく柔和な印象さえ覚えた。

四六時中夢に見ていた内地帰還、そして三年間において移動するごとに「ダモイ（内地帰還）」を繰り返されたことか。その都度落胆し続けてきたが、今度は真正銘の本物であった。

収容所内の様子が一変したのは言うまでもない。誰もか思いは同じ、内地のこと、親たちのこと、兄弟姉妹親戚友人知人郷土をしのび、次々の思いが頭の中を混乱させていく。

帰還命令の下達が行われた。同僚たちは有頂天になって大騒ぎで沸き上がっていた。しかしそれでもなおまた半信半疑の思いは無ではなかった。今まで後生大事にしていた物はほとんど失っていたから、自分の持ち物と言えばこれというものは無に等しかった。着の身着のままであった。

一応装具の整理をする。あかだらけの防寒外套、飯ごうの変形したもの、水筒、いずれもせん

のない水筒、雑のう、背のう、靴下代わりにする布片、身につけている以外はそんなものだろう。いつでも乗車でき得るよう準備万端整えて待機をしていた。

それでも乗車直前まで小作業の使役に就かせていたのであるから驚きである。ついに下達された、時昭和二十三年十月一日である。

ウクライナ発鉄道一カ月の旅

さあ大変、集結、装具調、乗車の編成などで混乱した。千人くらい単位の編成ではなかったかと思う。自分は有蓋貨車の二〇トン級の二段装置の貨車に割り当てられた。中央部には暖房を採るストーブが備え付けられてあった。一日夕刻ころ一応出発準備は完了した。さらばウクライナ、いろいろの思いを秘め、涙に明け暮れた最果ての地、異国の地を後にして、シベリア鉄道に向かって、郷愁の地限らない日本の郷土に向かって滑り出した。

ソ連領に入るときのような嚴重なる監視はなかつたけれども、一応は歩哨の警戒が行われていた。夜間はかなり冷え込んで防寒外套を着用していても寒さはこたえた。

いよいよ一カ月間のナホトカ行きの旅が始まったのである。駅に停車する場合は食事の配給、それから燃料の補給、それに生理的現象による排出作業が行われた。無罪放免となった抑留者も意気盛んであった。全国からの集合体であるからお国自慢の話、特産品そしてまた食べ物の話で車内は大いに盛り上がった。

車内においても体調が思わしくなくて我々と同じ気分になれなかつた者には同情を禁じ得なかつた。列車は特に計画的な輸送には思われなかつた。不規則な運行で、駅によっては一晩じゅう停車していたような進行であった。夜間ソ連邦の首都モスクワに着いた。さすがに首都だけに強烈な印象を受けた。こうこうとした真昼を思わせる偉容であった。十日も過ぎたころからソ連兵の監視

も緩やかになった。駅に着いたときなどは外に出て新鮮なる空気を腹いっぱい吸うこともできた。途中前後して走ってきた列車があったが、シベリア送りの囚人列車である、思想犯であるということ、我々の列車と違って周囲は嚴重であつたように思われた。

不規則な駅の停車時間、そんな折、隣の列車を見ると大根が六十トンの無蓋車に積んであつた。夜その大根を監視の目を盗んで雑のうへ入れて車内に持ち込んでストーブで煮て食した。砂糖大根の飯ごう炊さん、もちろん土などは落としてないはずだから底に土が残っている。

この補給によって体力の回復に役立ったことはいうまでもない。貨車内は笑い声も出るし、お国自慢も出るし、愉快な貨車の旅が続いた。しかし考えてみるに順調な運行ができていたならばこんなことはできなかったのである。

毎日変化のない旅が二十日以上も過ぎたころだと思われるが、ハバロフスク駅に着いたとき、ソ

連の兵隊が何か後方にわめいているので、何か不安の思いで様子をうかがっていると、一隊が下車させられたのである。長い間ウクライナ地方において苦勞を共にしてきた同僚がハバロフスクの収容所へ入所させられるということである。「リスト」に上っている警察官とか憲兵とか補助憲とか、そのような人だと言われていた。

彼らと決別して、一路シベリア鉄道はナホトカに向かつて走り続けた。今までの雰囲気とは違った風景になった。窓外は森林の中を走って行くのである。両わきはエゾマツ、トドマツ、樺松、ミズナラ、シラカバ類の森を進行して行った。十月一日に発車して二十数日も走ってきた。もう間もなく目的地には着くだろう。もう飽きてしまっていた。

ちょうどそんな折、本部車両からえらい連絡が入って来た。それに対して一同は憤慨した。ソ同盟をたたえる同盟歌を歌わなければならないというのだ。偉大なるソ連国家マルクス・レーニン主

義に共鳴し賛同していく表示である。それをやらなければ内地帰還はできないし、ナホトカに着いても戻返され他地区の勞役に服さねばならない。鳥肌の立つ思いである。

しかしそれではやむを得ない、覚悟するほかない。本部車両から同盟歌を教える者が各車両へ配置されて教えるわけであるが、歌詞も分からず歌調すら分かるはずがないのである。結局は声は出してはつきり歌えずともゼスチャーでごまかすよりはならないだろうということになった。

そんなこんなで超遅い列車であったが遂に十月三十日午後十時ころいよいよ待望のナホトカ港に到着した。我々と前後してきた囚人列車はどこで別れたか見えなくなっていた。

夜中に到着し、それから下車準備。暗闇の中で行動は大騒ぎであった。夜明けと同時に行動が開始された。埠頭周辺は混乱していた。

我々の一団が非常に幸運に恵まれていたことは、ちょうど引揚船の高砂丸が到着したばかりで

あったことである。我々はこれに乗船するとの情報が入った。何と恵まれたことか、幸運これ以上はなかった。せっかく奥地から内地帰還のためにナホトカ港に集結しても、引揚船が着いていないため、また逆戻りされ数カ月にわたって森林伐採その他の作業に従事したことを聞かされたので、何と言っても幸運のほかにはないと感じた。

そんな状況の中で入浴をし消毒を被服のほか、装具の検査等が次々と行なわれ、着々と帰還の順序に進められているのであるが、その合間においても同盟歌を合唱しなければならぬということである。この期に及んでそれによって通過ができないのではと誰もの心中は同じである。円陣を組んでわけの分からない合唱に声を上げ、手まねをしたり足を上げては様子をうかがって真剣そのものであり、帰るためには何でもするほかはないのである。我慢をし、耐え難い思いを忍んで行った行為はこっけいそのものであった。

十月三十日夜半到着して三十一日の乗船という

驚くべきスピードの行動である。

ウクライナから一カ月の旅、一日足らずの乗船に、目まぐるしくただただ夢中で過ごす中にも郷土に思いをはせて苦痛には思わなかった。

岸壁には一万トンの病院船「高砂丸」の雄姿が横たわっているではないか。乗船に当たって装具の検査が行われるが、今度が最後の検査だろう。検査に必要なものがあるのだろうか、疑問が残るだけである。くたびれた背のう、飯ごうのつぶれたもの、水筒の色あせて、雑のうの形だけのもの、よれよれの被服とロスキーの帽子の粗末なもの、何ら検査を必要とされるものは皆無である。一応検査は済んだのである、通過したのである。検査の通過した者から順に乗船のために列に入って準備に入った。これで本当に内地帰還ができるだろうか。郷里の諸々の顔が浮かんだ、再会ができるのだろうか。

はるかかなたには赤十字の鮮やかなマークのついた病院船「高砂丸」の船体が岸壁に横たわって

いる。何と素晴らしい雄姿であろう。待望の乗船が現実となった。乗船開始、次々と列をなし、タラップから船内に消えていく。自分の順番のなんと待ち遠しいことか。順位はほぼ真ん中くらいの位置だったのではないかと思う。収容人員は約三千人くらいだったのでないかと思う。順番は訪れたのである。足取りも軽くタラップを上がって行った。そのときの心中は昇天の境地であったのである。

船中に一歩踏み入れた途端に両脇には白衣の天使が我々の乗船する者を迎え、一人一人迎え入れてくれているのではないか。入ソ以来二年有余、日本人女性などには一度も会ったことも見たこともなかった。その彼女たちに会って日本女性の素晴らしさをつくづく感じたのである。そして数人の天使たちが頭を垂れ「長い間ご苦勞さまでした」と迎えられた、そのときの感激感動は何とも言えぬ思いで感涙にむせび泣きをしたのである。生涯忘れられぬ思いである。

乗船後、各部所に割り当てられてひとまず落ちていたのであるが、頭がつかえる狭い場所で身動きも思うようにならなかったが、そんなわがままを言っている場合か、自分たちが受ける最大の幸福が目前に迫っているのではないか。不幸にして内地帰還を夢見てあの最果ての地において力尽きて犠牲になった同僚を思うとき、何と幸運だったのかと感慨を新たにするのである。

船内は誰もが興奮のるつぼとなっていた。夜半であっても大変なる騒ぎで盛り上がっていた。

そんな中で、体調の不調、いわゆる栄養失調のみで静かに横たわっていた気の毒なる同僚も乗船していたのである。

引揚船「高砂丸」内でトラブルの起きたことも記しておかねばならない、ウクライナのある収容所において自分の地位を利用し同胞を苦しめた当所幹部（前述した収容所の場合）、逆境の中での耐えに耐えて生き抜いてきた者からすれば恨みは骨髓に達していたのであるから、そんな者たちは

この時ばかりと爆発した。横暴の限りを尽くした者に対しグループを組んで徹底的なる制裁を加えたのである。果たして犠牲を強要した者が悪人として裁きを受けるべきか、立場上ソ連の要求にやむなく応じなければならぬ場合があったのである。全収容所において行われたとは思わないが、自分たちが関係した収容所にまれにあったことは何とも悲しいことである。

十月三十一日零時、月が変わった十一月一日だ、ウクライナを出発してからシベリア鉄道を経て一カ月の旅、そして慌ただしい混乱の中で疑問を抱きながらも船内に納まっていいよいよ内地と陸という「ドラマ」、何か夢のような思いであった。さて一体この船はどこへ上陸するのだろうか、皆自分からなかった。

時間は刻々と過ぎていった。朝は四時過ぎころかと思われるが、誰かが「内地が見える、内地が見えてきた」大声が響く。「おう」という歓喜の声が湧き上がった。我先にと甲板へ急いだ。甲板

は黒山の人だかり、その中から白々と夜明けの前兆である。かすかに日本列島の一部が浮かんできた。「内地だ、日本だ」甲板に集まっていた者からどこからとなく鳴咽がこちらから聞こえてくる。自分も感極まってどうすることもできなかった。真の歓喜の男泣きである。これこそ生涯における感涙ではなかったろうか。日本海の京都舞鶴港であった。故国日本の土に到着したのである。その瞬間は誰も無口になっていた。内地帰還の第一歩を踏み入れたのである、まさに正真正銘の郷土日本への帰還であったのである。誰もが思いは故郷への思いを妄想していたのではないだろうか。

自分は昭和十九年に朝鮮平壤（ピョンヤン）に応召以来五年ぶりに、奇蹟とも思われる内地帰還ができた。しかし自分よりも更に軍隊の生活をして抑留の生活を七年も八年もあるいは十年以上もの先輩の人たちもいたのであるから、また格別なる思い感慨無量であったことを痛切に感じるの

ある。同時に、夢を果たせず、最果ての地、凍土に犠牲になられた同僚たちに対しては心からなるご冥福を祈りたいと思います。

自宅へは次の電報を打電した。

一ヒ ブジ マイトルニツク ゴアンシンコフ
トミ

母キヨに到着して打電をした。

付記

戦後五十八年を経た中で、追憶ソ連抑留の記を拙文をも顧みずして投稿するに当たり躊躇し複雑なる心境で大いに困惑した次第です。

過去に数多く発刊されている記録を読んで、切々と書き綴ったのに接し、ただただ涙するのである。

異国の地、あの最果ての凍土、さいの河原に生死の間をさまよいながら奇蹟とも言える生還を果たし得た者の感動はまさに大きいものであり表現に難しい。

時代は半世紀を経て大きく変化を来した中でソ連抑留体験者も年々減少して風化しようとしているけれども、ソ連抑留の現実には事実として語り継いでいかなければならない。ソ連国が行った抑留そして強制労働を強いられた我が同胞がどんな苦難の道をたどってきたか、理解されることを望むものである。

経歴

大正十二年十月二十七日

茨城県久慈郡大子町

生まれ

昭和十六年三月

茨城県立大子農学校

(現 大子第一高校)

卒業

昭和十九年七月

召集令状により応

召。朝鮮平壤第四十

二部隊に配属される

昭和二十三年十一月一日

引揚船「高砂丸」に

て帰還

復員後、木材製材業
に従事

昭和二十九年十一月一日

法人設立、有限会社

須藤製材所代表取締役
役に就任

昭和六十三年十月

社長を辞任、会長に

就任

昭和六十三年十月二十七日

社団法人全木連関東

支部から木材振興に

より表彰を受ける

公選職歴

大子町議会議員に六期連続当選

昭和四十三年三月三十一日 一期一

昭和六十三年三月三十一日 六期

六期間中、大子町議会議長、茨城県町村議会議
長会副議長、全国過疎地域振興連盟理事などの役

職を歴任

茨城県町村議会議長会より永年勤続（二十四
年）により特別表彰を受ける

叙 勲 平成十（一九九八）年十一月三日 自治
功勞勲五等瑞宝章を受章

現在 社会福祉法人保内園副理事長

大子町退職議員会（やみぞ会）会長

シベリア抑留の思い出

茨城県 和 知 義 美

集団で耐えられたか

私はバム鉄道とシベリア本線をつなぐ支線の
駅・テルマに四年過ごした。

旧軍服は入ソ翌年には満服、ロシアの被服に、
そして帽子も。食器はしばらく飯ごうを使い宿舎
で食べ、食堂になったのは二年目あたりで、照明
はまだランプでした。宿舎の防寒補修、わら布
団、生活はすべてそこにあるものを利用する。靴
下の糸、手製の針もつくった。衣服の破れは、寒
さだけでなく凍傷の原因になる。夜トイレにも着